

稱讚

一三〇号

二〇二二年二月一日発行

心から和める春が早く来ますように、
今はもう少しの間、慎みの生活を続け
てみましょう。
がんばらないけどあきらめない、無理
はせず、何卒、13自愛ください。

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚 寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanjii.com

なもあみだぶつ

南無阿弥陀仏をとなふれば

してんだいおう

四天大王もろともに

よるひるつねにまもりつつ

あつき

よろづの悪鬼をちかづけず

『浄土和讃 現世利益和讃 第六首』

新型コロナウイルスの感染がパンデミックを起こして、三度目の節分を迎えました。現在、第六波にのまれており、その感染力はこれまでの波とは比べものにならないくらい高いです。重症化しないというところが、経済を止めずということが、私たちの判断を見誤らせたことも一因なのだろうと思われまます。

科学の発達により、早くワクチンが出来、感染者への早期治療薬も出来きたお陰により、現状ですまされているのかもしれない。



ませんが、専門家でも、まだ判らないことがあり、科学的に解明されるには時間を

要することあります。

しかし、そのことが、いずれ役に立てていくことが科学の力なのだと思います。が、ほんの数ヶ月前の第五波の経験が活かされていないことを思うと、長い時間が経つと、「忘れた頃にやってくる」で、日頃は、「生きていること」が、当たり前だと思っている人間の愚かさを思います。

昔から、私たちは、いろいろな禍に見舞われてきました。

立春の前の節分では「鬼は外、福は内」(地域によって違いがありますが)と言って、豆まきをするのが恒例となっております。私の地域では、二年前の当地区の住居センターで、親子さんの前で声なしで豆まきを行って以来、去年・今年と中止になってしまいました。

『続日本紀』には「追儼ついな」(鬼やらいの源流)という行事があり、文武天皇の慶雲三年(七〇六年)には行われていたことが記されておりまます。この追儼は、年中の病疫を追い払うために大晦日の夜に行われ、

(次ページにつづく)

神に扮した方相氏という役が目に見えない疫鬼を追い払うものでしたが、平安末期になると鬼を追い払う役の方相氏が、逆に鬼に見立てられ、群臣らに桃の弓や葦の矢で駆逐されたり、大声や鼓を鳴らして追い払う宮中行事になりました。

一方、節分は平安時代の貴族の日記に記されており、その儀式は、災害除けと延命・長寿を目的に読経が行われ、邪悪・邪気を退散させるためのものとは違ったようです。いつしか節分の儀式に、豆(魔滅)まきが登場し、病疫を追い払う追儼の風習が入り、「鬼は外、福は内」と言いながら豆まきをするように、公家・武士だけでなく民間にも広がったとのこと。旧暦上、正月と節分が前後することがあったようで、江戸時代には、節分として完全に結びついたようです。

「鬼」の中で一番強いと言われた「酒呑童子」は平安時代、一条天皇が、都で姫たちが次々と消えていくのを訝しみ、安倍晴明に占わせると、酒呑童子なる鬼の所為だと判り、源頼光に退治するように命じました。頼光らは、山伏に扮し酒呑童子に毒酒を飲ませ、寝たところ首をはね退治しました。酒呑童子は最後に「鬼に横道なきものを」と言ったそうです。

酒呑童子が都を恐怖におとしめていた頃、九州地方で流行った疫病が九九四年に京都に入り、京中が死者であふれていたそ

うです。

鬼の酒呑童子の正体は、病原菌だとも言われます。「鬼」は「隠(おぬ)」からきていると言われ、鬼とは、「姿形を隠して見えない」ことで恐れられていました。「毒酒」とは、今で言う「アルコール消毒」のことではないかと言うのです。

洋の東西を問わず、いつの時代も、人々は感染症を恐れ悩まされてきて、見える化して、対処してきたのでしよう。仏教では「鬼」を「煩惱」に譬、次のように分けて表現してきました。

赤鬼→貪欲(欲望や渴望など強い欲)
青鬼→瞋恚(悪意や憎しみ、怒り)

黄(白)鬼→悪作・挙掉(動揺・執着)

緑鬼→惛沈・睡眠(怠惰・不健康不摂生)
黒鬼→疑惑(疑い・卑しい・愚痴・不満)

親鸞聖人の「よろづの悪鬼をちかづけず」とは、「南無阿弥陀仏」を称えたら、病気に罹らないとか治るとか、煩惱が無くならないことではなく、確かに感染症は恐れ憎むものですが、単に「悪」のレッテルを貼らず、罹患して死に至るとしても、「救われない」ではなく、どんな状況でも必ず仏に成っていくことを知らされるということではないでしょうか。

※『本の万華鏡第二回大豆一粒よりマメ知識』(国立国会図書館)・インターネット「スッキリ」・【鬼】の正体とは？観光旅行情報掲載等参照

まてまてまて

まだまだコロナ禍のなかですが、

本年も毎月六日・十六日・二十六日は、午後二時より「のんのん法話会」を開催しております。

気軽に「ご聴聞にご参拝ください。」

ご一緒に「お正信偈」をおつとめしてお念仏のなかに居ることを確かめ合いましよう。(但し、二月十六日は休座いたします)



現世利益和讃について

三首目

いっさい くどく
一切の功德にすぐれたる

なもあみだぶつ

南無阿弥陀仏をとなふれば

さんぜ じゅうしよう

三世の重障みなながら

てん きょうみ

かならず転じて軽微なり

軽くなし、少なくなす、うすくなす意

【現代語訳】

他のあらゆる功德（善根）よりも優れた善根功德であるお念仏を称えようと、過去・現在・未来の三世の間に、私たちが犯す大きな罪（＝成仏への障がい）は全て、必ず軽微なものに変えるのである（とも伝教大師は言われた）。（豊原大成師）

いかなる功德をもつてしてもおよばないあらゆる功德の中の王である南無阿弥陀仏の名号の心をいただいて念仏を称える身になれば、無始以来の過去世から積もりにもり未来世にまで続いていく現在の障りは

全てが必ず転じ変えられて、それに惑わされない心が出来上がっていきます。（白川晴顕師）

ナモアミダブツの名号は、あらゆる功德を具え、他のどのような善根にも優れているから、名号、ナモアミダブツを称えるならば、過去・現在・未来にわたる三世の重い罪や障りは、必ず転ぜられて、「軽くなり、少なくなり、うすく」なります。（山崎龍明師）

豊原先生が、「とも伝教大師は言われた」と付則しておられるように、この和讃は前の二首から続いている現世利益の総論の一首だろうと思います。

金子大樂師は次のようなことを述べておられます。

真宗における現世利益というものはどういふものであるかということを経世利益和讃十五首によって、我々はそれを学びとることが出来る。これと同じ様なことが『教行信証』の「化身土文類」の末巻にもあることでありますから、真宗では現世利益とは言わないというふうな簡単にたずけることはできない。一方で現世利益を求むべきものではないと説きながら、他方では現世利益和讃までも説かれてある。それはちよつと矛盾のようでありますが、決してそうではないということを経世利益十五

首の和讃によって知ることが出来るであろう。

そういう着眼から十五首を、前の四首と後の十一首とに分けたら、前の四首は言わば現世利益の在り方とでも言いましょうか、そういうことにいたしましょうか。現世利益という事実、こういうものが現世利益というものであるという事実を語るものが、第五首からの、つまり後の十一首であります。前の四首は現世利益という事についての総論とでも言いましょうか、限定的に現世利益の性格というものを述べられたものと考えられる。そういったしますと、その四首をまた二つに分けて、はじめの二首は現世利益というものは公のものである。阿弥陀如来が現れてきて息災延命のために金光明の寿命品をお説きになったのであるけれども、その息災延命のために、誰の息災延命であるかといえ、ば、一切衆生の息災延命である。それは『金光明経』というお経は、鎮護国家の経典であつて、この経によつて国家が安穩になるのであるという、そういう意から説かれたものであり、そういう意によつて読まれてきたのであります。従つて念仏を称えるということが、朝家の御ため国民のために念仏を申されるのは結構であると、こういって念仏をもうして世の中安穩なれ、仏法広まれというのが、そういうことであつたに違ひがない。

の南無阿弥陀仏の名号です。

はて、どうして南無阿弥陀仏と称えると息災延命・七難消滅の利益が得られるのでしよう。その答えが、この第三首には、込められていると思います。

「一切の功德にすぐれたる 南無阿弥陀仏をとなふれば」と詠われております。

『教行信証』行巻の初めに、「大行とはすなはち無碍光如来の名を称するなり。この行はすなはちこれもろもろの善本を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す。真如一実の功德宝海なり」と説かれており、「全徳施名の名号と言われてきました。

このことは、親鸞聖人が法然聖人から教わってきたことでありました。『選択本願念仏集』にも「名号はこれ万徳の帰するところなり」「名号の功德もつとも勝となす」「仏の名号の功德、余の一切の功德に勝れたり」に見受けられます。

また、同じく行巻には「南無の言は帰命なり。……」をもつて帰命は本願招喚の勅命なり。発願回向といふは、如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり。即是其行といふは、すなはち選択本願これなり」と説かれます。

これは、「南無阿弥陀仏」は名に徳のはたらきが具わっている「名体不二」の名号であり、「お念仏」とは、私のはからいではなく、阿弥陀如来の（大）行であると言われてきました。

伝教大師の『末法灯明記』撰述以来、日本は

末法に入りました。それは、誰も自ら悟りに至

れない、仏に成れないし、そのための修行も誰もできない。「罪悪深重の凡夫」でしかない私と知らされ、そういう私は、唯一、南無阿弥陀仏のお念仏でしか救われないと知らされる。

そう知らしてくださるのが、南無阿弥陀仏のお念仏であるからこそ、息災延命・七難消滅の利益を得られると仰っておられるのではないのでしょうか。

そして、そのお念仏を称えたら、「三世の重障みなながら かならず転じて軽微なり」という利益をも与えてくださる。

この利益は、阿弥陀さまが「我が名を十方に聞かすめ、必ず全てを仏にします」とのご本願をお立てになって以来、面々と空間と時間を超えて、伝えられてきました。

『仏説観無量寿経』には、「……十念を具足して南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するがゆゑに、念々の中において八十億劫の生死の罪を除く」と説かれています。

道綽禪師の『安樂集』には、『摩訶衍』龍樹菩薩造『大智度論』のなかに説きていふがごとし。「……もしよくつねに念仏三昧を修すれば、現在・過去・未来を問ふことなく一切諸障ごとごとくみな除くる」と説かれています。

親鸞聖人は、罪・障りを「除く」とか「消す」と言わずに、「転ずる」と言われます。浄土真宗は「転成」の宗教とも言われています。

『親鸞聖人御消息』には、「御身にかぎらず念仏申さんひとびとは、わが御身の料はおぼし

めさずとも、朝家の御ため国民のために念仏

を申しあはせたまひ候はば、めでたう候ふべし。往生を不定におぼしめさんひとは、まづわが身の往生をおぼしめして、御念仏候べし。わが身の往生一定とおぼしめさんひとは、仏の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために御念仏ころにいて申して、世のなか安穩なれ、

仏法ひろまれとおぼしめすべしとぞ、おぼえ候ふ。」と仰っておられます。その中、「往生を不定におぼしめさんひとは、まづわが身の往生をおぼしめして、御念仏候べし。」とあります。

「南無阿弥陀仏をとなふれば」とおっしゃる対象は、おそらく、お念仏に遇ってない方、

遇ったばかりの方、人を真似てお念仏する方、お念仏して何になると思っている方々などではなかつたでしょうか。

「三世の重障」とは、この過去・現在・未来の世にわたって続いていく自己というものの生死流転、迷いの中の存在でしかない私ということですから、個別に道徳を守らなかつたとか、法律を犯した罪も、私は含まれると思います。

そういう私が、「南無阿弥陀仏」のおいわれを聞いていく度に、だんだんと「罪悪深重の凡夫」と知らされていく。

「転じて軽微なり」とは、重障を持ったままで生きられるということ。「南無阿弥陀仏」を称えるところに、この阿弥陀が居りますと思ひ出してくださると味わえたらと思います。

※いろんな文を参照して、まとまりのない文になり、申し訳ありません。

親鸞聖人御誕生八五〇年 立教開宗八〇〇年 慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

今年のNHK大河ドラマは「鎌倉殿の13人」です。十三人とは、源頼朝を取り巻く豪族・貴族の中で、頼朝亡



き後、建久十(一一九九年)四月に鎌倉幕府の集団指導体制として「十三人の合議制」が発足しました。

ドラマでは、俳優・小栗旬が扮する北条義時ですが、その十三人の中に、三善康信という貴族がおります。

実は、この三善康信は、親鸞聖人の妻、恵信尼さまの叔父さまにあたる方なので、おそらくこのドラマは主人公である北条義時の一生を追っておると思いますので、少なくとも承久三(一二二二)年の承久の乱の翌々年元仁元(一二二四)年、北条義時(六十二歳)が亡くなるまでのドラマだろうと思います。

そこには、法然聖人の弟子になった熊谷直実や、承元の法難のときの後鳥羽上皇だったり、関白の九条兼実、延暦寺慈円和尚も登場してくるかもしれませんね。

このコーナーでは、鎌倉時代の政治や災害、民衆の生活と宗教を照らし合わせて、見てみたいと思います。

先月号まで、恵信尼さまのことを掲載しておりましたが、恵信尼さまが三善家の出であることとを説いておられる今井雅晴氏の論文を今回は紹介させていただきます



恵信尼さまと三善氏(上)

①西念寺本堂の「恵信尼坐像」

親鸞聖人の妻として恵信尼さまがとても有名です。西念寺本堂には、内陣の中央に本尊阿弥陀如来立像が安置されています。

その右奥には親鸞聖人坐像が安置されています。そして左奥は、なんと恵信尼さまの坐像が安置されているのです。私はこのような浄土真宗寺院は見たことがありません

本願寺系の浄土真宗寺院では、右奥に親鸞聖人の画像、左奥に蓮如の画像が掛けているのが一般的です。大谷派では蓮如の代わりに教如の画像が掛かっていたりします

しかし北関東、特に茨城県の北部地方では、右奥に親鸞聖人坐像が安置されていることが多いです。画像ではなく、木造の坐像です。そして左奥は開基の坐像の場合が多いです。開基というのは事実上その寺院を開いたとされている僧です。

ところが西念寺では右奥に親鸞聖人坐像が安置してあるのはともかく、左奥は恵信尼さまの坐像なのです。まったく、ここ西念寺だけの特色です。西念寺、ひいては稲田の恵信尼さまがいかに大切にされてきたかということを示すものでしょう。恵信尼さまは越後で二人の子どもを生み、常陸へ移ってきてから三人生みましました。また親鸞聖人の念仏布教という目的に協力しました恵信尼さまは関東でとても評判がよかったです。

西念寺本堂の恵信尼坐像は、室町時代に制作されたものと推定されます。穏やかな表情の老年の女性です。尼頭巾と呼ばれる、顔だけを出して頭から首、肩まで被う頭巾を着けていますので、明らかに出家した姿を表わしています。

②「恵信尼画像」

西念寺には、同じく室町時代に描かれたと推定される恵信尼さまの画像が伝来されています。掛け軸の形で、絹の布に絵の具で描いてあります。この描き方を絹本着色（けんぼんちやくしよく）といいます。絹の織り方は時代によって異なることがありますのでその織り方を調べることが制作年代を推定することにつながります。絵を描いてあるのが紙でしたら、紙本（しほん）といいます。

この「恵信尼画像」は、向かって右を向いて尼頭巾を被った、数珠をつまぐっている、前述の坐像よりさらに年配と思われる女性の姿です。やさしそうな、また苦勞を経てきたような表情をしています。

この絵像には二ヶ所に文字が書いてあります

縦長の小さい方には、「恵信禪尼」と書いてあります。書きかたは「恵信禪尼」と書いてあります。いわゆる札名です。大きい方には五行にわたって次のように書いてあります。

生死（しようじ）の家には
疑（うたがい）をもて所止（やむところ）
となし涅槃（ねはん）の
城には信を
もて能入（よくいる）とす

「この世はほんとうのものではないと疑って、住むことを止めましょう。極楽には信心を持つことによつて入ることが出来ます」という意味です。こちらの区画を色紙方といい、文章を讀みます。あわせて色紙方讚です。

またこの画像の恵信尼さまの着物には、日野氏の紋「下り藤」が描いてあります。恵信尼さまは三善氏の出身であることは明らかですから当時の慣例に従つて三善氏の紋が描かれるべきだったのです。それなのに「下り藤」が描かれているのはなぜか。研究課題です。

西念寺の「恵信尼画像」は、現在しられている限りは最古の恵信尼さまの画像です。貴重な画像です。ただとても痛んでいて、壁などに掛けて見ることはとてもできません。画像を開いたり巻いたりするだけで絵の具が剥がれ落ちる危険性が大きいのです。

③恵信尼さまの出身は京都の貴族

恵信尼さまの出身については、もともと京都の貴族三善氏説と越後の豪族三善氏説とがありました。しかし第二次世界大戦後、越後豪族出身説がもてはやされ、定説のようになっていきました。京都貴族説を主張する研究者もいました（赤松俊秀『親鸞』吉川弘文館、一九六一年）ほとんど無視されてきました。しかし、やはり貴族出身説を採用するべきでしょう（拙著『恵信尼―親鸞とともに歩んだ六十年―』法蔵

館、二〇一三年）。

親鸞聖人が三五歳で越後へ流された時、恵信尼さまも一緒に越後へ下向しました。そこで五年弱、流罪は赦免になりましたが聖人は京都に帰りませんでした。恵信尼さまも同じでした。さらに二年後、二人は関東を目指して子ども二人を連れて移住しました。親鸞聖人四二歳、恵信尼さま三三歳、娘の小黒女房八歳くらい、息子の信蓮房四歳でした。いずれも数え年です。幼児二人を連れての旅はそう簡単ではなかったはず。この一家は、稲田郷の最上位の領主である宇都宮頼綱に手厚く迎えられたであろうと考えられることは、この連載でも以前に述べました。

では恵信尼さまという人はどのような女性だったのでしょうか。またその実家である三善氏とはどのような家で、いかなる雰囲気の家だったのでしょうか。それを検討することは、恵信尼さまの人格や曠劫を考えていく上で重要なことと私は判断しています。この連載の今回と次回で、そのことについて検討していきたいと思ひます。

※「所止」の意味合いが、従来の法然聖人の「生死の家に止まるのは、疑いの情を持つてゐるからだ」とは違います。

※宇都宮頼綱は北関東の大豪族であり法然聖人晩年のお弟子でもあります。十三人の合議制には加わっておりませんが、三善康信と会つたりしているかもしれません。もしかするとこのドラマにも出てくるかもしれませんね。
※次回は、三善氏について、掲載させていただきます。



稱讚寺 行事予定

二〇二二年 二月の行事予定



六日(日) 日曜礼拝 午前十時
のんのん法話会 午後二時

一三日(日) 日曜礼拝 午前十時

一六日(水) のんのん法話会 休座

二〇日(日) 日曜礼拝 午前一〇時

二六日(土) のんのん法話会 午後二時

二七日(日) 日曜礼拝 午前一〇時

※申し訳ありません。二月十四日(月)から十七日(木)までお寺を留守いたします。

※毎朝七時 おあさじ
※毎夕六時 おゆうじ

ただ
「今を生きる」

二〇二二年「心のともしび」二月カレンダーより

二〇二二年 三月の行事予定

六日(日) 日曜礼拝 午前十時
のんのん法話会 午後二時

一三日(日) 日曜礼拝 休座

一六日(水) のんのん法話会 午後二時

二〇日(日) 春期彼岸会 午後二時

二六日(土) のんのん法話会 午後二時

二七日(日) 日曜礼拝 午前一〇時

二〇二二年 四月の行事予定

三日(日) 日曜礼拝 午前十時

六日(水) のんのん法話会 午後二時

一〇日(日) 日曜礼拝 午前十時

一六日(土) のんのん法話会 午後二時
(兼立教開宗記念)

一七日(日) 日曜礼拝 午前十時

二四日(日) 日曜礼拝 午前十時

二六日(火) のんのん法話会 午後二時

編集後記

二頁では、酒吞童子を感染症の擬人化と掲載しましたが、鬼は実在していたのかというところで、顔が赤いことから、飲んでいたワインが人の血に見えたとかで、難破したロシア人が山賊の頭領となって、人々を襲っていたとも言われております。

『鬼滅の刃』から考える鬼の正体には、結論として、「実は鬼と呼ばれた人々には、そして鬼を名乗った人々にも、ある共通する性格があった。それは、ふつうの政治や経済の仕組みに従わない、もしくはそこから逃げ出した人々だったという点だ。実在した鬼は、学問的な表現をつかうなら、中央の体制や秩序から阻害されたり排除されたりした人々、あるいは離脱した人々だった。古代の用語でいえば、彼らは朝廷などの権威に「まつろわぬ」、つまり支配されない人々だった。」と述べられていました。

酒吞童子の最後の「鬼に横道なきものに」は、「鬼は騙すことはしないが、人間は騙し合っている」と言うことです。

「反社」とか「テロ」行為は認められるものではありません。また、独裁、権威的な政治、軍国主義も憂います。日本の私たちも差別被差別の歴史を繰り返しております。大衆主義もどうかと思います。自身、いつの間にか差別者側に立っていることがあることを肝に銘じたいものです。